

部便りの書き方

1 部便りとは

OB・OGの方々への試合結果報告。それが部便りです。我々陸上部員が不自由なく競技に取り組むことができるのはOB・OGの方々からの多大なる支援のおかげです。ですから、そのOB・OGの方々へ試合の結果を報告することは陸上部員として最低限の義務と言えるでしょう。義務と言うと堅苦しくなってしまうかもしれませんが、部便りは我々の活躍をアピールできる数少ない公式の手段です。部便りを通して積極的にOB・OGの方々へ部の様子を伝えましょう。

具体的に部便りは、試合ごとに〈監督の言葉〉、〈主将・女子主将の言葉〉、〈試合経過〉、〈試合結果〉、〈自己記録更新者〉、〈部内5傑〉、〈行事予定〉などをまとめたものを発送します。これらのうち、部便り係でない人が文章を担当するのが〈試合経過〉です。以下ではその書き方を説明します。

2 文章の構成

試合経過の文章は基本的に

- 競技前
- 競技中
- 競技後

の3部構成で段落分けして書いて下さい。(予選の場合は3部構成で段落分けせず、各組ごとに段落分けして下さい)

1種目あたりの文字数は約500字を目安に書いて下さい。あくまで500字というのは目安ですが、書いた文章が長すぎたり短すぎたりする場合にはだいたい400～600字程度になるよう工夫して下さい。

2.1 競技前

ここでは出場選手の紹介と競技が始まる以前の前評判などを書いて下さい。出場選手の紹介は、名前(学年)の表記で統一し、名前を並べる際は組・レーン順に書いて下さい。なお、中・長距離種目およびフィールド種目では学年順に書いて下さい。

(例1:男子110mH予選)

2組7レーンに堀内(2年)の出場。

(例2:男子400m決勝)

2レーンに梶岡(2年)、4レーンに深澤(2年)、6レーンに伊勢田(4年)の出場。

(例3:男子800m決勝)

新井(4年)、小澤(3年)、野村(1年)の出場。

(例4:女子砲丸投決勝)

清水(4年)、宮崎(3年)の出場。

(例5:男子4×100mR予選)

1組8レーンに田中(3年)-渡辺(1年)-斉藤(2年)-尾崎(2年)の走順で出場。

出場選手の紹介後は、前評判を始め、グラウンドコンディション、その時点での得点状況などを書くのが良いでしょう。

(例1:女子4×100mR決勝)

本大会3連覇中の名大が優位であったが、他大学の力が拮抗し接戦が予想されていた。

(例2:男子走幅跳決勝)

跳躍3本目までは雨が降り風が巻く中での試技となった。

(例3:男子4×400mR決勝)

このたびの京大戦は総合優勝をかけた得点争いが最終種目までもつれこむ大接戦であり、勝敗を決するリレーに応援にも熱が入る。

2.2 競技中

言わずもがな、競技中の様子・試合展開を書いて下さい。文章のメインとなる箇所なので競技の臨場感が伝わるよう工夫して書きましょう。競技前で書けなかった選手の調子・特徴などを書くのも良いでしょう。見本を参考にして下さい。

記録は〈記録〉の○位もしくは〈記録〉で○位の表記で統一し、必ず載せるようにして下さい。なお、予選の場合には○着、決勝の場合には○位というよう

に、「着」と「位」にも注意して下さい。また、短距離種目(100m,200m,110mH,100mH)の場合には風も忘れずに書いて下さい。

(例 1:男子 100m 予選)

…しかし残念にも 11”23 の 3 着であった。このとき風は+0.4m だった。

(例 2:男子 5000m 決勝)

…脅威の粘りで 2 人をおかわし 15”30”78 の 3 位でゴールした。

(例 3:男子 走高跳決勝)

…結果、自己ベストを 5cm 更新した 1m80 の 2 位であった。

2.3 競技後

競技後の講評を書いて下さい。

(例 1:女子 800m 決勝)

両選手とも実力を発揮し、力の差を見つけたレースであった。見事なスコンク勝ちで東大は 7 点を獲得した。

(例 2:男子 3000mSC 決勝)

七大戦最初の対校種目で、2 人とも自己ベストを更新する見事な走りでスタンドを沸かせ、チームに勢いを与えた。

(例 3:男子 三段跳決勝)

この種目での東大の得点は 11 点。辛勝だった。来年に向けて、この冬、特に 3 番手の成長が求められるだろう。

3 内容・表記に関する注意

日本語の間違い

正しい日本語を使いましょう。

- (誤) 投げれなかった → (正) 投げられなかった
- (誤) 対抗選手 → (正) 対校選手
- (誤) 一泡喰わす → (正) 一泡吹かせる
- (誤) 期待に答える → (正) 期待に応える

英数字の表記

学年・種目名・順位・記録など、数字は基本的に半角英数字で書いてください。括弧や”、’なども半角英数字をお願いします。

- (誤) 4 0 0 mH → (正)400mH
- (誤)1 ’ 59 ” 76 → (正)1’59”76
- (誤) 五位でゴール → (正)5 位でゴール
- (誤) 日下 (1 年) の出場 → (正) 日下 (1 年) の出場

ただしレー種目は 4 × 400mR のように”×”は全角で構いません。

4 その他

今年度からの試みとして試合の写真の一部を部便りに数枚載せることにしました。そのため、デジタルカメラ等を持っている人は是非写真提供に協力して下さい。もちろん競技や応援に支障が出ない範囲で構わないので、競技中の写真を撮ってもらえればと思います。

部便りに載せる原稿は、各パートごとに部便り係を通じて部便り主任に送られた後、部便り主任がまとめて編集(LaTeX)し、さらにその後部便り係全体で校正作業を行います。そのため期限を過ぎても原稿が来ない場合、編集作業が遅れて校正作業が不十分になり、不完全な出来のまま発送されてしまうことになりかねません。そのため、各種目の部便り担当者は期限厳守で各パートの部便り係に原稿を送って下さい。

5 見本

男子三段跳決勝(関東 IC)

佐野(4年)、倉員(3年)の出場。前日の雨も止み、比較的競技しやすい環境での試合となった。佐野、倉員ともに4月にそれぞれ自己ベスト、大学ベストを記録し調子は上がってきており、応援にも力が入る。

倉員は昨シーズンに比べて助走スピードが上がっており、1本目の跳躍ではつぶれながらも13m82を跳ぶ。残りの跳躍では果敢に攻めて大きな記録を狙ってきたが、ステップのタイミングがもう少しのところをつかめず記録を伸ばすことができない。惜しくも13m82の16位で競技を終了した。佐野は、2本目終了時点で、14m32で7位。記録に対して、ステップの際に体が乗り切れておらず、余裕を残しての3跳

目となったが、直後に記録を2人に越されて9位となってしまった。しかし、佐野は試技ごとに記録を伸ばす選手であり、期待は高まる。そして空気が張り詰めるなか、見事自己ベストの14m46を跳び、1cm差で8位に食い込んだ。これが決勝記録となり14m46の8位であった。

今回は国際武道大学の参入等で、例年よりもはるかに厳しい闘いとなったが、2人とも健闘した見事な試合であった。残る対校戦では、表彰台を独占してほしい。

男子110mH 予選 (関東 IC)

4組4レーンに尾崎(2年)の出場。昨年1年生ながら準決勝まで進出した尾崎にとって今年は決勝進出、また東大記録の更新を目指してのレースであった。1台目までは出遅れたものの、持ち前のスピードを生かし中盤で2番手に浮上。1着とはやや離れたものの3着以降に大きく差をつけそのまま15"41の2着でゴール。このときの風は-1.8mだった。細かい技術面では満足のいくものではなかったが準決勝に確実に進出したという点でよいレースだった。

5組3レーンに梅沢(4年)の出場。今年で最高学年となった梅沢は自己ベストを大きく更新しての決勝進出を目指してのレースであった。前半は出遅れてしまうものの抜群のハードリングで中盤には4着まで順位を上げてきた。しかし8台目の着地でバランスを崩し減速、9台目のハードルを手で倒してしまい途中棄権となってしまった。このときの風は-0.8mだった。残念な結果だったがハードルにつきもののアクシデントとして本人はすぐに気持ちを切り替えており、以降の対校戦でのベストの更新に期待は持ち越しとなった。

男子400m 決勝 (一橋戦)

2レーンに深澤(2年)、4レーンに伊勢田(4年)、6レーンに梶岡(2年)の出場。競技開始から苦戦が続く中、持ちタイムで上回るこの種目では勝ち越しが期待された。

しかし期待とは裏腹にいきなりアクシデントが襲う。エース伊勢田がスターターのミスで号砲から一人取り残されてしまった。大きく出遅れた伊勢田は必死に追いすがるとの、開いた差は如何ともしがた。一人を捉えたがオーバーペースから最後は失速し、転倒しながらのフィニッシュで53"41の5位に終わった。一方無難なスタートを切った深澤と梶岡だったが、積極的にとばす一橋大の2人に前半でリードを許してしまう。第3コーナーを過ぎて猛然と追いつ

げた深澤もラストで追いつききれずこのまま惨敗かと思われたが、残り10mでレースをリードしていた岡本が転倒。そこを深澤と、終始粘り強い走りを見せた梶岡が逆転し、深澤が51"81で2位、梶岡が51"92で3位に食い込み辛くも引き分けに持ち込んだ。

不運もあったとはいえ各選手とも自己記録には遠く及ばず、京大戦に向け猛省が促される結果となった。

女子4×100mR 決勝 (京大戦)

4レーンに大久保(1年)-小原(4年)-宮崎(3年)-日下(1年)の走順で出場。今季ベストで1秒上をいく京大に対し、選考会で向田(4年)に勝った宮崎をメンバーに。また、スピードのある日下を4走に起用して勝負を挑む。

1走大久保はまずまずのスタートをきると、アウトレーンを走る京大とほぼ五角のレースを展開し、2走小原へとバトンパス。100mで優勝した京大の早瀬を相手に、小原は全く離されることのない見事な走りを見せる。しかし、3走宮崎の飛び出しのタイミングが早すぎ、急ブレーキをかけてバトンを受けたため、京大に先行されてしまう。そこから何とか前を追う宮崎だが、4走日下も練習のときを上回るスピードで飛び出してしまい、宮崎は追いつけない。大声で日下を減速させゾーンオーバーだけは必死に防いだが、日下が再び加速し直したときには、京大との差は10m以上。日下のスピードでも追いつける距離ではなく、54"73の2位でゴール。

走力面では京大に引けを取らないメンバーであっただけに、悔やんでも悔やみきれない結果となってしまった。小原は引退してしまうが、今後残る3人はこの失敗を決して忘れず、来シーズンのリレーチームを作っていくしてほしい。

文責：今村 岳